地域通貨「たま」について

　地域通貨「たま」とは、川崎市多摩区の市民、市民団体、商店などで流通する通貨である。今回は、たまを運営しているNPO法人ぐらす・かわさきの江田さんに話を伺った。2018年２月27日、佐名木と川村と私の三人でぐらす・かわさきの事務所でインタビューさせていただいた。

　まず、インタビューでわかったことを述べよう。たまが作られたきっかけの一つにエンデの遺言らしい。エンデの遺言の放送後の2004年から2005年頃、地域通貨は数多く作られたが、現在まで続くものは少ない。後で触れるのでここでは細かいことは割愛するが、たまも衰退の道を辿りつつあるようだ。エンデの遺言を見て、人と人をつなぐツールとして地域通貨を採用したそうだ。今回、ぐらす・かわさきの事務所で話を伺ったのだが、そこでは市民の方々が麻雀をしていた。江田さんは縁側のような人が集まる場所を作りたいとおっしゃっていた。また、外国人の女性が「日本は、話さなくてもつまりコミュニケーションを取らなくても暮らしていける」と江田さんに話したことも教えてくださった。例えば駅で切符を買うときは自動精算機でボタンを押せば買えるし、スーパーマーケットでも商品をレジに持って行ってお金を渡せば、特に会話をせずに購入できる。しかしその女性は商店街で出身地を聞かれたとき嬉しい気持ちになったという。以上の理由からたまは今日衰退している人々のつながりを取り戻すため、地域活性化やコミュニティの立て直しを目的に作られた。たまは2007年に発行、流通が開始された。計画から流通までは約二年かかった。地域通貨について商店街でアンケート調査をしたり、他の地域通貨の視察(ピーナッツ、アトム、温銭など)に行ったりしたそうだ。インタビューで教えていただいた、たまの問題点をあげよう。これは前述したたまの衰退の原因でもある。一つ目は2001年から地域貢献のために亡くなった夫の資産を寄付してくださった方がいたので10年間はぐらす・かわさきの資金は潤っていたが、現在は資金不足である。そのため、事務局の方を有償で雇うことが難しい。しかし、すべてボランティアと言うわけにはいかず常駐の職員には有償にしなければ人手不足となる。二つ目は本当に使えるのか、という不安が人々の中にあることだ。実際、たまがどこで使えるのかがまだまだ知られていない部分もある。また、円と交換できないことが未だ信用の面で人々から嫌煙される。実際はぐらす・かわさきは川崎市の事業を一部委託している代わりに金銭的支援を受けているので、ある程度の信用はあるといえる。たまは現在衰退しており、江田さんは今年、たまを立て直したいとおっしゃっていた。しかし、具体的には模索中だという。

ここで、たまの基本統計をわかる範囲で示そう。たまが使える事業者会員は53店舗(「たま」が使えるお店マップより2017年10月現在)である。川崎市の施設では、岡本太郎美術館、かわさき宙と緑の科学館、日本民家園で使用可能である。イベントは例えば、『100％「たま」マルシェ』というフリーマーケットが今年３月４日に行われている。このようなフリーマーケットを不定期に年４回ほどおこなっているそうだ。他のイベントもあるのか調べたい。資金は個人会員の登録料、個人会員からの寄付、会員以外の市民からの寄付がある。今後調べるべきことは、個人会員数、会員数や取引高の推移、川崎市からの委託事業の内容と助成金、事業者会員のたまの使い道である。

続いて、たまのシステムを述べよう。これは、説明していただいたほか、いただいたパンフレットにも書かれている。たまは個人会員、事業者会員、団体会員が登録できる。個人会員は初めに登録料500円を払うと1500たまがもらえる。団体会員や運営委員会に対するボランティアや人助けのお礼などとしてたまを得て、事業者会員の店舗などで使うことができる。個人会員から登録料を得ることで資金源になるほか、悪意がある者をはぶくことができる。事業者会員は多摩区の商店街や飲食店が会員となりたまが使える店を提供する。団体会員は地域貢献をしていることを条件に会員になることができ、年間２万たまをもらえる。また、たまはearthday　moneyという地域通貨と互換ができる。

　最後に、大学内通貨の問題とからめていこう。現在、話し合いを続ける中で大学内通貨の存在意義、利用目的がぶれている部分がある。私たち西部ゼミのゼミ生としては、学んだことを試したいという気持ちがあるが、学生が地域通貨を使うことのメリットを感じてくれる通貨を作るにはどうしたらいいのかと思う。たまや他の地域通貨のように地域活性化などの目的が先に決まりその手段が地域通貨であること、目的がぶれないことが成功のポイントとなるはずだから、このままやることは危険だと考えられる。また、仮に実際運用する上での金銭的問題もある。計画、開発はボランティアでも良いが、現在アプリ化の話も出ておりその場合の専修大学の学生規模が使えるサーバーの用意が難しい。紙幣タイプだとしても紙の費用がかかる。また、他大学の有志でプログラミングをしてくださるかもしれない方はなるべく早い決定を求めている。ある意味貨幣の代替となるわけだから、セキュリティの観点からも開発に時間がかかるからだ。私としては紙幣方式ならもう少し計画の時間もとれると思うが、意見をそろえることも難しい。現時点の問題はたまと同様に資金不足と学生への知名度、信用の低さの他、運営システムが定まっていないことである。しかし、これからも話し合いを重ねてよりよいものがつくれるようにしていきたい。なお、江田さんに大学内通貨実現の意向を伝えたところ、好意的な反応をしてくださった。大学内通貨が実現すればたまとの互換や電子システムも共有等も協力してくださるそうだ。